

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 26 年 10 月 29 日	
所属部局・職	霊長類研究所・博士課程学生
氏名	若森 参

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
タンザニア連邦共和国、ダル・エス・サラーム、アルーシャ、ザンジバル
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
The 3 rd International Workshop on Tropical Biodiversity and Conservation に参加
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
平成 26 年 9 月 20 日 ~ 平成 26 年 9 月 30 日 (11 日間)
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
Tanzania Wildlife Research Institute (TAWIRI)

5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。

今回の渡航は、まず2日間のワークショップから始まった。ワークショップでは、タンザニアと日本の他に、インド、ブラジル、マレーシアから研究者が訪れ、各国で行っている研究の発表が行われた。日本から参加した大学院生は、それぞれの研究をポスターにまとめ発表をした。私は修士課程で行った霊長類の尾長と尾椎に関する研究をポスター発表し、3人のタンザニア人研究者から有意義なコメントをもらうことができた。私の研究は、骨格標本を材料としているのだが、タンザニアでは頭骨の骨格は保存されていても、全身骨格を所蔵管理しているところはほとんどないということであった。

ワークショップ後は、マニャラ湖国立公園とンゴロンゴロ自然保護区へそれぞれ1日ずつサファリに出かけた。少し目が慣れてくると、サイチョウ、ハゲワシ、ミティスモンキー、ベルベットモンキーなどが見られ、草原ではインパラ、ハイエナ、ライオン、ヌー、シマウマ、水辺では大勢のカバとフラミンゴを見ることができた。タンザニアは野生動物の宝庫だと聞いてはいたが、こうも間近で見られることに感激した。



(左)ヌーとフラミンゴ (中) ベルベットモンキー 共にマニャラ湖国立公園。
(右) ゴールデンジャッカルの狩、ウサギを追っている。ンゴロンゴロ自然保護区。

滞在の後半は、ザンジバル島へ行き、船で沖合2kmほどのところでドルフィンウォッチを行った。イルカが現れるスポットへ小舟で移動し、イルカと遭遇すると船頭はエンジンを止め、乗客が水中から観察するというものであった。イルカをのべ5群れ見ることができた。私たちの他にも4、5隻同様の小舟が周囲にあり、イルカを追い回しており、イルカにストレスを与えてしまっているのではないかと感じることもあった。

サファリでライオンの親子に出会った時も、同じように感じた。ライオンを発見すると瞬く間にサファリカーが十数台ライオンの親子を取り囲み、歩いていくところを後ろから追いかけて走行していた。観光客の立場からすると、より近くでライオンを見たいという願望を叶えてくれている。しかし、十数台の車に取り囲まれてしまい、道路近くを移動している間は追従されてしまうライオンをかわいそうに思った。

サファリカーは道路から外れて走行してはならないという決まりがあるということだが、今回の場合のように、道路上である限りどこまでも追いかけることができってしまう。ライオンやほかの動物がサファリカーの接近をストレスに感じてしまえば、彼らはサファリカーの気配を感じたら逃げ隠れするようになり、将来

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

的には今回のように間近に動物を見ることができなくなってしまう可能性もある。この経験は、エコツーリズムと野生動物の保全を長期間にわたって両立させていくために必要な、旅行者のマナーや案内人の教育方針を考える上で、重要な知見となった。



(右)ライオンの親子がサファリカーに囲まれてしまっている。
ンゴロンゴロ自然保護区。

6. その他 (特記事項など)